

心豊かな子どもにも育って

NHKで教育番組を制作

パラリンピック
金メダリストおびなたくにこ
大日方邦子さんを訪ねて

2006トリノパラリンピック・大回転競技

今冬のトリノ・パラリンピックで金メダル、銀メダル二を獲得したアルペンスキーの大日方邦子さん(34)＝横浜市出身＝は、NHK教育番組のディレクターでもある。世界のトップアスリートであると同時に多忙なママコミ人。第一人者の地位を維持しようと思えば思うほど金銭的負担を強いられ、仕事との両立に悩む。その一方で、障害を持つが故にいじめに遭った体験者として、心豊かな子どもたちが育つような番組を作りたい、と熱く語る。大日方さんの素顔に迫った。

2006トリノパラリンピック・大回転競技
"金メダル"獲得

——トリノ冬季五輪の日本勢は不振でしたが、パラリンピックでは合計9個のメダルを獲得し、日本中を沸かせました。なかでも、大回転で金、滑降とスーパー大回転で銀を手にした大日方さんの活躍は、目覚ましいものがありました。

大日方 出発十日前の練習で、がけから転落し鎖骨垂脱臼。でも、出場断念なんて少しも考えず、練習を続けました。おかげさまでメダルを三つ取れましたが、大会前の調子では回転が一番よく、メダルに最も近いと思っていました。それが失敗。奥が深いというか、難しいものです。

三歳のとき、交通事故に遭い右足切断、左足もひざが曲がりにくいなど機能障害が残りますが、子どものころから体を動かすことが好き。七歳の

値観でしか物を見ないため、個性的な人や枠からはみ出た行為は目障り、無視、仲間はずれ、いじめの対象となる。障害者は、健常者との違いが分かりやすいから、すべいじめられる。

日常生活で車いすを利用し始めたのは、長野パラリンピック以降で、横浜市内の小学校から高校(神奈川県立柏陽高校)までは徒歩通学を通じた。中央大学法学部を卒業し、NHKに入局、現在3チャンネルの学校教育番組を担当。また、この十一月、トリノでの活躍が評価され、神奈川スポーツ賞が贈られる。

とき水泳を覚え、車いすテニスや卓球に挑戦したことも。高校二年のとき巡り合ったのがチェアスキー。五年後、リレハンメル・パラリンピックに出場するほどの技量に達し、以来、トリノまで四大会連続出場を果たす。

華やかな実績。しかし、忘れることのできない、つらい体験を味わったこともある。

——障害者から、小学生や中学生のころ、よくいじめに遭った、という声を聞きますが…。

大日方 私も中学時代は深刻でした。入学早々、掃除の時間に水をまかれ、ぞうきんを投げつけられました。障害があるのに勉強ができて生意気だ、むかつく、という理不尽なもの。先生に相談しても、いじめられる側にも非があるのでは、と取り上げてもらえませんでした。いじめは次第に陰湿になり、しかも周囲は見てみぬふり。孤立感を深めました。不登校になったら負けだと思ひ、意地でも学校へ行きました。

——いじめの原因や背景を、どのよう

に分析しますか。
大日方 流行の物を持っては仲間、持たないと仲間はずれに、というように、同質を求め異質を排除する傾向は、今も昔も変わっていない。画一的な偏



——児童を対象とした番組制作に取り組んでいると聞いています。かなり思い入れもあるのではないのでしょうか。

大日方 現在は小学校二、三年生向けの「おはなしのくに」という国語の番組を担当しています。一流の語り手が表情豊かに物語を語り聞かせ、子どもの想像力を養い、お話の楽しさを味わってもらおうというものです。制作者としては、登場人物や物語の内容を通じて、世の中にはいろいろな生き方をしている人がおり、多様な考え方がある、ということも伝えていきたいですね。

画一的な物の見方は、時にいじめなどの原因になることがあります。人生を計る物差しは一つではない、ということを知ってほしいと願っています。

子どもたちにも、周囲を見渡せるだけの心のゆとりを持ってほしいですね。

番組制作の傍ら、ホームページの制作、原稿執筆、著作権処理などの仕事に加え、日本パラリンピック委員会運営委員、日本パラリンピアンズ協会副会長、厚生労働省の審議会委員を務め、多忙な毎日を送る。その一方で、現役の競技選手として欠かせない日々のトレーニング、大会への出場が待っている。

——五輪選手の多くは企業に支えら

れ、仕事や経済的負担などからは軽減されています。しかし、パラリンピック選手に対する企業の応援は、まだまだ微々たるものです。遠征や練習に要する経費も自己負担で、と聞いています。

大日方 長野パラリンピック時代と比較すると、最近はワールドカップが年十二試合も開催されるなど、国際試合は健常者並みに増え、選手を取り巻く環境は大きく変わりました。ポイントによるランキング制も確立したので、トップを維持するには多くの大会に出なければなりません。その結果、経費は年間三百万円前後に達します。競技を断念する選手が出るのも当然でしょう。

私の場合、NHKや同僚の理解が得られ、仕事人と競技者の両立が出来ています。それでも番組の取りだめや、大会会場からメールによる仕事の指示は欠かせません。

個人としては、四年後のバンクーバーまで現役を続けたいのですが、同時に新たに競技を始める後輩のためにも選手が置かれている経済的基盤の改善に取り組みたいと思います。

聞き手 大谷 義輝

(神奈川県厚生文化事業団専務理事)